

永田和宏歌集

『置行堀』

(現代短歌社)

「この世に置いてきぼりにされた者」として、逝ってしまった「あなた」を想う歌が、強くやさしく印象に残る。

あなたがふ言葉やさしもこの庭に花を待ちつつ聞くこともなし

天井のひとつと色の変はりたり夜ごとあなたに線香を焚く

他方、歌のテーマは多岐にわたる。細胞生物学者としての作者に身近な生きものや、孫の様子も自由自在に詠む。

ハダカデバネズミすなはち裸出菌鼠にして長生きしかも癌にはならぬ

繰り返すことがよろこび箱に入れ箱から出して子のぬひぐるみ

表現や内容は平易であるが、「生」を見る目は「死」を想う心につながっている。

また、現代の政治の状況や権力、それをもたらしただ過去への憤りも詠む。

沖繩を返せとかの日歌ひるし己れを問ひて問ひ詰むるべし

そこには自らへの批判も含まれている。生と死、過去と現在の間を越えて、作者の心は縦横無尽に動いている。

(田中 泉)

奥田亡羊歌集

『花』

(砂子屋書房)

『亡羊』『男歌男』に続く三冊目の歌集。花の歌が多いが家族の歌や昭和終期以降現在までの社会・事件も扱っている。ボカロPの famago 氏との共同制作(一つの歌を二人で作る)という毛色の変わった新作や、巻末には詩も含まれている。

印象的なのは、作者の鋭い観察眼とパラドキシカルで率直な現実の捉え方だ。

手のひらを透きて降りゆく夜の雪の／熱さを君に伝えたかった

内臓のごとき紫色のものびくと動く手袋の手に

子のなみだ落ちてわが手に熱かりき何処より来し命かと思ふ

ミッシヨンなインポツシブルだ／向日葵のように手ぶらで笑えだなんて

身体が異物によつて意識され、却つて感覚が研ぎ澄まされるという逆説、そして「具体的な事柄」な(抽象概念)という

倒錯した表現が味わい深い。二首目は産後すぐのお子さんの歌であろう。意外な表現ではあるが、主観抜きの描写のおかげで現実の映像が浮かぶ。

(清水佑太郎)

嶋稟太郎歌集

『羽と風鈴』

(書肆侃侃房)

風に鳴る楽器を思う エアコンの風が静かに背中に触れる
一九八八年生まれの作者による第一歌集。風を詠んでいる歌が特に印象的だ。

おもむろに風吹く午後地のの上を擦りながら飛ぶ包装容器

いつときの風に揉まれてカルパスの包みの殻が飛ばされてゆく

風だけではない。光や音など、些細なことを繊細に感じながら、日々を丁寧に歌う。

遠いほど眩しく見えるゆつくりと流れる河を渡り切るまで

通勤電車から一首。川面が光を反射して眩しい。そんな景色についてのようで、夢や憧れ、はたまた離れたからこそわかる

故郷の眩しさかもしれない。

ふるさとを遠く離れて東京のわが家の湯に柚子ひとつあり

一人暮らしならしないかもしれない冬の「ゆず湯」。現在の自分の家庭に、ふるさとの家族を思う。作者の出身は石巻市。

歌に深く詠むことはないが、震災を経て、思うことはあるだろう。

(高橋梨穂子)